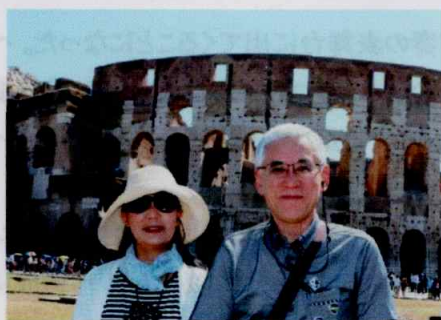


## アマチュア・オーケストラの楽しみ

後藤公一（昭 50）

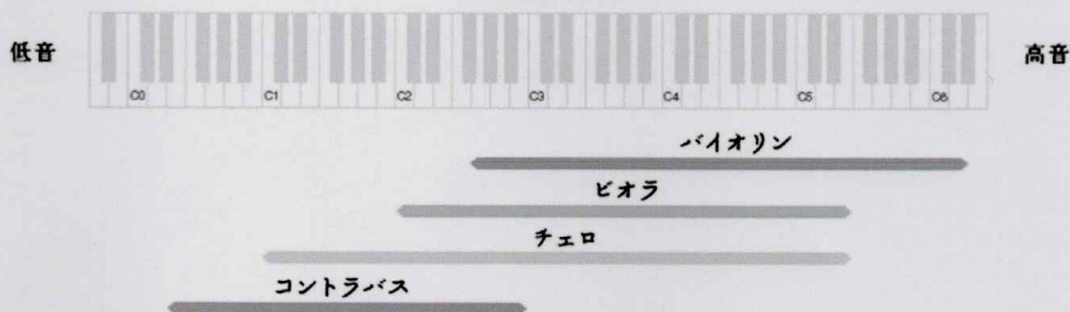


2年前に会社を退職し時間の余裕が出来たことから、コントラバスの演奏を再開することになった。戸山高校の時には室内管弦楽班でチェロを演奏し、大学での管弦学部ではチェロとコントラバスの両方を担当した。なぜコントラバスを始めたかという、大学の時のオケではチェロの演奏者が多く逆にコントラバスが不人気で奏者が不足していたためやってみようということだった。大きな

楽器で目立つので演奏姿の恰好が良いとも考えた。初めての演奏曲はチャイコフスキーの第五交響曲で見よう見まねでなんとか演奏会は乗り切ることが出来た。社会人になってからも市民オケで数年間両方の楽器を弾いた。30代半ばになり勤務先では管理職になったためオケ活動をする余裕がなくなり、しかも沖縄への転勤ということにもなりコントラバスは古巣の立川管弦楽団に貸出すことにした。

それから25年のブランクを経て、一昨年7月にコントラバスを返却してもらった。弦を全部張替え、弓の毛も交換して練習を開始した。12月の八千代市の演奏会に出演するのが目標だ。教則本を購入してチェックしてみると、弓の持ち方や楽器の構え方が正しくないことがわかり、昔の癖を少しずつ直していった。正しい音程で確りとした音を出す基礎練習や総譜を読んで演奏会の曲をCDに合わせて弾いたりした。8月末には地元の八千代交響楽団に入団希望を出し、9月に楽器を持ってリハーサルに見学参加することになった。最初のリハーサルでシューベルトの大ハ長調交響曲を弾いたがもともと好きな曲だったので、久々のアンサンブルに無類の感動を覚えた。コントラバスのパートリーダーからは「大丈夫ですから入団してください。」とのことで入団が決まり毎週日曜日に練習に参加して12月の本番へと臨むことになった。当日の演奏は弾けないところは色々あったものの再開後の演奏会としてはまあまあの出来だったのではないだろうか。

弦楽器の音域



コントラバスは弦楽器では一番大きな楽器で最も低い音域を担当する。私の楽器では長さ 185cm、幅 66cm、重さは 12.5kg。最低音域であり楽器が大きく小回りが利かないことからメロディ演奏には不向きで、それはチェロ以上の弦楽器や管楽器が担当することになる。従ってコントラバスは和声の基音を低音域で弾くことが多く、長い音符で弾いたり、短く刻んだり、分散和音で弾いたりする。当然譜面の複雑さはバイオリン等高音域の楽器と比べるとシンプルでオーケストラの中での活躍は極めて地味であることが多い。

ところが大作曲家の登場でコントラバスがオーケストラ演奏の表舞台に出てくることになった。ベートーヴェン(1770-1827)は当時親交のあったコントラバスの名手ドラゴネッティ(1763-1846)の演奏に啓発されてコントラバスの可能性を見出し、オーケストラの中で重要な役割を与えることになった。

これはベートーヴェンの第九交響曲 4 楽章の冒頭部分のコントラバスとチェロだけで奏される。コントラバスとチェロが低音で何回も登場し、有名な「歓喜の歌」が出るまで催促し続けるという構成になっている。

ベートーヴェン 交響曲第九番 4 楽章チェロ・コントラバスパート冒頭



実は次回(2018年12月)の演奏会ではベートーヴェンの英雄交響曲を演奏することになっているがコントラバスパートは非常に難しく四苦八苦している。

ところで八千代交響楽団には家内もクラリネットに参加している。もともと10年前に団員だったのだが子育てなどで忙しくなって中断していた。子供が全員社会人になり、私が団員になったこともあり本人も復帰を希望していたが、弦楽器と違い管楽器は定員枠があるためなかなか再入団を認めてもらえない状態が続いていた。ところが私が入団してみるとクラリネットパートの団員があまり練習に出ていない実態がわかり、これならば入る余地があると思い団長に相談して入団を許可してもらった。現在は自宅で2人そろって個人練習をして毎週のリハーサルに参加している。団員は八千代市および近隣の市の小学生から70歳代の幅広い年齢層の住民で構成されている。



リハーサルは全員で演奏する合奏、弦と管で分ける分奏が行われる。指導者は本番の指揮者と専門のトレーナーが行う。たとえば 50 分以上かかる交響曲を楽章ごとに分けて、曲の先頭から順に練習していく。音の強弱、音の長さ、音程、リズムを合わせるなど基礎の部分で問題があると止めて何回も練習をする。音色、テンポの変化、間の取り方など微妙なニュアンスなども追加していく。

会社の関係者、異業種交流会、学校の同窓会、ゴルフ仲間などの付き合いに加えて、地元でも共通の目的を持つ仲間と週一で交流できることは大きな財産だと思う。アマチュアのオケであるためプロのような優れた演奏はできないし、それならば長時間練習して上手くなるかといっても限界がある。しかし音楽好きにとって自分の音を出して他のパートと合わせるアンサンブルは、プロオケの名演奏を聞くのとは一味違った他に代えがたい喜びを感じる。楽譜を読んで楽器を弾き、他の奏者と合わせて音楽を作る作業は、結構な時間が必要であり、一定の緊張感もある。ボケ防止には良い薬だと思えば楽器が運べなくなるまで頑張るつもりだ。

6 月の定期演奏会には深井奨学財団の庄内さんにお越し頂いた。その時の曲目解説は私が書いたもので以下に紹介する。

#### シューマン 交響曲第 1 番 変ロ長調作品 38「春」

ロベルト・シューマン(1810 - 1856 年)はドイツ・ザクセン地方で書籍商を営む裕福な家庭に生まれ、文学と音楽に交わる恵まれた環境で成長した。第 1 交響曲の作曲は 1841 年 1 月から 2 月で、スケッチはわずか 4 日間で仕上げたという。作曲の動機やインスピレーションをもたらした背景として以下三つの出来事が考えられる。1840 年にヴィーク家に反対されていたクララ・ヴィークとの結婚にこぎ着けたこと。シューベルトの遺品の中から「大ハ長調交響曲」の楽譜を発見し、メンデルスゾーンの指揮による演奏を聴いたこと。交流のあった詩人アドルフ・ベットガーの「春の詩」を読んだこと。

初演は 1841 年 3 月 31 日、メンデルスゾーン指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団による。冒頭 2 小節のファンファーレは初稿では現在よりも 3 度低い音、つまり主部の第 1 主題と同じ旋

律であった。ところがリハーサルでバルブなしのホルンとトランペットでは特殊な奏法となり、上手く鳴らない音があることから、メンデルスゾーンのアドバイスもあり現在の音に変更して初演された。初稿は七十二候に準えれば早春の「東風凍を解く」だが、変更後は3度上げたため色彩感が増して春が進んだ「草木萌え動く」のイメージになった。

シューマンは初演後さらに推敲を重ね 1853 年に総譜を出版した。フレーズの締めめの音を変える、第3楽章に第2トリオを追加する、第4楽章の序奏直後にあったフルートの華やかなソロを再現部前のカデンツァに移すなど随所で改定を行った。

初稿では第1楽章「春の始まり」、第2楽章「夕べ」、第3楽章「楽しい遊び」、第4楽章「たけなわの春」、という標題が付けられ、ベートーヴェンの「田園交響曲」に連なる標題交響曲の手法を継承した。改定後に標題は削除されたが、演奏・鑑賞いづれにおいても各楽章の心象風景を想起するに有意義なものであろう。

楽器編成はフルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、トライアングル、弦5部

(コントラバス 後藤公一)

以上

于田县农民专业合作社名录

于田县农民专业合作社名录

农民专业合作社

- (202) 五尖 田国 县 金
- (202) 第一 田国 县 金
- (202) 田国 田国 县 金
- (202) 田国 田国 县 金
- (202) 田国 田国 县 金
- (202) 田国 田国 县 金

农民专业合作社

于田县农民专业合作社名录

于田县农民专业合作社

于田县农民专业合作社

千葉城北会会誌 第15号

平30年(2018年)11月発行

発行 千葉城北会

会 長 岡田 光正 (S35)

副 会 長 堀口俊一郎 (S32)

副 会 長 於保 洋生 (S35)

副 会 長 白石治比古 (S41)

顧 問 尾崎 英二 (S31)

顧 問 齊藤 徳浩 (S32)

事務局

270-0014 松戸市小金きよしヶ丘 3-5-2

白石 治比古 (S41)

電話 047-348-1263